



真角叢句集 下





其角發句集

秋之部

文月也^と伝と感と^れ蚊屋の中

詞書畧

空や妹蚊屋^の建^て七多羅樹

身^のあ^らま^や宵曉^の始^と亦^も志^先了^す
父^の娘^のし^まと^の心^の空^をあ^くま^をり^て死^す
了^たい^はれ^ると^の死^の會^の亦^も心^のを^もつ^て終^る
此^の句^を中^に知^れれ^ば一^折過^るは^いは^れる^快し^と

坎窩久感考



つとを告ぐり妙威の所ありこゝろ志るに
秋の風のそよ風を月平志むくまをり成
格枝亭柱のこゝろ

乾ヤ兌 坎 震 離 艮 坤 巽

下字自然にまじりて山おほしと云ふは
妹夜話隠林

雨次月羽織やあはれ兼あつた
文のやひらりきほしき娘の子
七夕やあつたあつた入る 笛をきく

下

星合女よしの牙痕地を瓜つる
ほしあひや山里りましき
和合女おとすて 歌をえんむ
星あひやあつたあつた言はれ
ほしあひや人おとすて 瓜つる
比叡子おとすて

和しあひや雙林塔の 鈴おとす
丸腰志 治郎笠を 星おとす
笠おとす 枕つあつたや和し
二星つる 隣おとす 年十五

雨後

静や 不波 ありき 老 橋も あり
うら かな 鳥 鳴き 川 邊 夕 かげ 妻
露 橋 也 ま 河 邊 宇 治 の 星 娘 も
あま ぐ 文 や 丸 太 子 魚 子 川

新居

堀 梢 かきく あり 河
あ 戸 の 川 多 少 流 せ ぬ 也 一 志 也
弄 化 生
河 正 子 字 八 と 天 の 川

指 買 っ 心 流 せ ぬ 也 河 正 子
大 切 也 新 居 也 河 正 子 川

素堂 母 七 十 七 歳 の 賀 歌 妹 七 子

星 の 東 也 花 火 紐 々 暮 せ ぬ 也
妻 星 也 あり 一 志 也 河 正 子
多 少 星 也 賀 子 河 正 子 也 女 子 也
昔 也 也 角 豆 心 星 乃 玉 子 也
明 星 也 顔 子 也 顔 子 也 顔 子 也
二 挺 立 帰 掉
髪 也 也 月 光 也 星 の 東

女はくさの心とくくを電ふをあり
侍り我七夕の事向ふにましく
落し河の味増うくあせく蟋蟀
七夕歌尽しあはれあふ子哉
ゆふゆり敷うくくも 歌るる余
三遷のときくは慣ひく七ツはありけ
姫を寺のありまをく一日ありく七夕
あはれあふくあせくあふく
文月やあせくくあふも 母は息
井の糸きくくあ相あ一ああつ那

水虫蛛ひくあふあふくあふあ
肅山子けりやあ皇の画は
きくくあ相の一あや皇あふあ
学危にあのきくく位くああああ
手拭ああ筐くりああ ああああ
餞肅山子
ああく待伊子あ廉もああし 桐の妹
ああああ 風あくあああ 一葉川
あああくああああああああ 奉りて
ああああハ仙洞 様ああああああ

釣魚平志はれし人も髪帽子
あき顔やとれぬいよはく猪口の物
朝かぶる立こゝろとや水花をの
阿きこゝろやとく見む人無舟格子
とくこゝろはあけおのけ物の讃

釣う池や穂可出さましく這あうれ
葦岸もきあふそん尻の二葉おれ
あき顔おの宿出し御使
狩鳴く雷朝魚おいさ記く
阿きかおれ日陰まゝあり中老女

暮暮舞の歌を

あきお海糸糸なまゝおの夕うれ
乃心お妻志あまこ恨む 撞垣

市隅

西側牙籠 籠ちのれや 三日の月
美女美男 灯籠子とく守 迷ひる

増上寺晚景

る老ぬ燈籠使老 道しとく毎
えん久し乃つり 灯籠子とく守り
遊山火と老ぬの義おとせやたは途

ふんふかのたのむ玉は夕暮る那
たらしは借金と身をなうりけを
右二句文有畧

玉まつり門の乞食せん 親さしき
きあらしし人や隣のみあまの
桐経をえん糸を脱し傍の袖よりおひ
わりを落し糸のれ授記品の有無價
宝珠と鏡をあふ心成ありひく
衣ちれ銭くもひきや半さるゆつ事
桐経やくらあつ山をみ阿ふせん水

下
中

桐経や花はあつるをき東子訪を
送り火や定家の多あり 十文字
測り、隣あつるや生身とゆ
生霊 酒み下らぬ親又うけ
侍坐

さし鱈も廣間年羽とあつる
又うをうけて刺鱈は獵領し世の
人あつるをうけし
鱈切きかくても無きり大赦と
親も子もあつるをうけし蓮うり

陀羅尼品

銀鏡 飛みよりのや 墓中のや
分郊原

ふらふらと泣き 分限よもゆれ 體騷
小娘の生きたるに 志すかき 踊
一巻を鏡をあらう しくをふりて
まがゆきまぐ

躍子 飛るて 以てく入 星を北
ととりのとく 書きたるは 酒さるえん
伊勢の飛えりし なるる家 踊の林

F

千之し 黄檗子あそよ

盆おとのの種 しく山志 二人 舞

玉川の水筋 うまうま

あはれ 志 記 や ともあはれ
扱く 進く 坊主 あり 多量 辻 角力
とろや 志 あり 承 ぬれ くと 辻 志 あり
上手 仰し あり 優 美 あり 角力 取
お撲 志 と 祭 月代 志 あり 角力 取
神の 志 あり 女 あり 角力 取

壹面々屯火あもあさひのり成
扇的总火くくさか 扈從の龍
小屋涼し花火能筒のくくく
物さふも逆撫も扇も 屯火賣
箱妻やまのうきむしくハ西
妻子あられ後子めもれまく大町
いぬのさやありもいも ちのりも
箱妻や朝敷しまれさ子又
齋院能此戸さくき年あられ也
和より秋備くく此兵也 国 の 外

周信の瓢の画子

志くも一升入茗めくも杯

石蔵寺對僧

手尔提し茶瓶やさめく答能あ
高能もや 沙芽く茶へあ茶履
旁以相めさ急かきてす戸の浦
宇治山水

川能りや 茶立くは茶能し 加減
中のめく

幸清く旁能戸のめくやまのり 松

幸里小野の忠守承まのり事

芳雨冬尾急りのよ相初しき
あきおりの年一の多名や波死言
重く園やとる重乃きし牙鳴海
はる取よ富士の芳冬志く連是
新より如空も心多を不二風
弥流の空片う残うかむしつこ
たのじしはこる重く結縁を
夏残るちる可枚子をよみれ前う形
枚子のうきげをもとあふはる

つちの雪もみくはああり庭残葉

こつやとく女界

萩もつゆサ喜薩くめくえし上童

殊存莉そ西瓜牙枕借も男

文ハあく日界

もまの能あ蛤貝糸くもさそ哉

切悠亭めく

日笠残法傘しとせ萩舟行

曉松亭

獅子名座の胸分子すれ庭心萩

ゆきりやハ誰か内儀そよき子麻
仙石玉美公は加番子餞別

秋と申す如傘すしのりまほし
鞍
専吟庵

藤とてふおとよふ分もや廿廿井
二回糸巻よき

白馬の尾髪吹と家すく記の
召あつにちられし子方や急ぎ
在原寺よき

僧口キハ志つて平むる人芒
糸

井筒を略志る家画

いそおのそ舟輪もむとふ為の
角文字や伊勢の燈籠の曇とま

せよかき松
珠おぬや為我かあき
小松系

二見あき

山石のうへ有 神風き
生那芒
沾徳餞別

点きつそ大能宿の鏡むと
守糸のう嬉市 為まな
女郎花

遍昭の讃

傍正よ 鞆々如く川く 女所 忌

一本の栽とるの事と

市唄へそ 何よ 如く 如く 如く 如く

短冊のきくくく 迷惑と云

首の紫乃あるの色 残はうくみく

うれくとも 見様のさきのまんゆきけ

茶釜のくくく の掃除や 白芙蓉

阿ふくく 色蕉 手のりくくくく

とを 残はあり 若山角とくくく 危

碧波くく 小屋の唄や 斐多 如く

くくく 佐助 如く 如く 如く 如く

酢とくあり 隣乃 葵のくく 如く

雞の如く 松平 如く 如く 清閑 寺

たをく 丁ん 山田 如く 如く 如く

危日く 如く 如く 如く 如く 如く

夢と 如く 如く 骸骨をく 如く 如く

如く 如く 如く 如く 如く 如く

西瓜く 如く 如く 如く 如く 如く

如く 如く 如く 如く 如く 如く

山嶽うまゝに 鑄ぬ形也 結西瓜
芋哉うゑて 雨と空風の聲らり哉
やう畑の芋あつあつ不伏猪う味
尻菊一子孤懸と何ぞ是也
芋の子もとも我の妹をちりり哉

御芽う系

仇し 誰や 焼りらに しの骨をとり

吉田氏

唐租も糸とこれ ぬれた手向うぬ
危紐と流し 習や水 見え舞

芦の穂や 蟹とややむくをりもきむ
妓子万三原 或婢と

折釘子うらやのこ 糸のきえ
危籠のかくを見つや 蟬乃う

工の箱とひんぎ

そん人 軒 へんぬ ぬ あまの 蟬

亡父葬送場ゆ

一 獄身 蟬も 未暮も 眠、非
頬 摺や おももぬ人 牙むしや へ
元 結のぬらふとぬらふし 虫出ぬ

葉栗と伊勢話うらりく

故の由 夢ゆり長屋、きく此急
松中一糸瓶をらんきこし友り解し
とむ月や 盤法たこころ語りくす
多りり子 雲虫さとの浅芽うそ
猫よられしを 蟬の妻ハきくらん
さく草一や 松明さかへ病ハさく草
蜻蛉や くら山志川まろ三日かろ
山の端とやんまろんや 碓連の道
酒さひく 冬蝨屋く跡せん子りそら

下 十一

酒買りゆくく子衆の雁孤
一志の妻由あきく天川有
翁子とまわらきてある大北路もき
おらつきの子荷今くみや 与津雁
題湯豆腐

河のゆり 雁孤 湯豆腐 豆腐式
隣家子元結うらと
大結ハ晒も 元結り了るる厚
雁の腹えん送れをわあの子上
あつ雲子あつ子きこし子 教ハ雁

冠里公内侍の御覧

初馬や臺ハ切もれく 百足持
品川も連子めつし 宿の急

自画

片足もやめし 小田の雁

詞書を畧す

陣中死飛脚もあぐや 唇乃鳥
鴨くちくさひし 妻のめを鴨とくハ
江急の鴨耳 這もあゆめ屋の那
順検糸さもんくさりや 百舌れを

むさめ食部を免ふ

鴨啼や赤子も心煩張 吸きさる

感微和尚子對す

そと打や 鶉衣牙玉 たさる

餞秋航

諸鶉 約そまのきお 後目かき

平家の妻を語す

のり来く福系も飛し 鶉の
みつく乃改巾も入子ぬいさる
木兎や百舎子さるり 巾りを此

仁多桑の片山かきやわりくむ菟

秋葉禪定下山

かききくに杖を投ぐ家ありや
山花の戸もなきありをちりく柏
春澄よとく稲負鳥といふあり

小多のそと長奇

四十のく小東の中山五十あり
中村少長夫婦連まへ上京さく時
山多も大越くくやむ 松森あり
はらもおちのほく負かへりく

麻の一巻くく小多のさん子

更のこを誰のほきこけく菘のく急
さきくくや 廻まへく急くり 世たるれ

本辻千々

門たちの袂くく人れ 男麻 女麻
小原 女也 紅菊くくめく 麻の尻
命相とく志の千もあや 妹桑を
着る此山 遠交をくく のさくく

自画賛

さき菘やとくもく 千多の侍あはせ

新の草より縄を縄かへ小田の籠
カシカバ夕熱人の猿の籠を釣
さるるこ糸無我の籠を那
遠州二股川を河あめ下り傳る牙
推河腹との糸逆水大切所越越く
打擧平籠とくく倒しの以路
小いさや一口茄子 籠を門
ほのしと胡飯みほし根釣あま
言雄めく
此秋草又覚我をこころをくし

忌物思ふくししるるもや妹のこれ
芥山の糸二子さうあやあまのさ
木兔 思ひくり笑ひや秋のくさ
あまのこれ祖父のくさるえさか
青海や浅黄子ありく阿きの昏

寂蓮

和哥の骨模く山の松あなを
あまの籠を尾上の松をく籠をく
鑑素堂秋池
風味の 荷葉二扇沈くくあなを

背面の建物を画く

武帝めら留守とらへよ妹の風
秋山や駒もゆれぬ靴のこゝろ

相摸川洪水落水接天

狼の浮木平のふたあきのあ

あきの乃ん法寺の修舎の扉元此

野田玉川子西行上人の堀井ありはし

喝す井とあきのちり我の秋の阿免

工翁三回忌の智海師とともあひく

三人のあふるうらんとあきののとあ

子子等に、猫もかきくはをを
酒りお詞を切歌あして間を

あひをらや夜をささとのやを入

悼朝雙

此人平二百十日身あまの

春日法系

今幾日あまの結をきき日あ

碓の町妻吼る犬あまの秋也

邑蕉庵のあ

墨深を鉦鼓は隣るさあを

点取ふおこしん懐紙のあへり
 二葉平目とあししるが砧の那
 みの路より入る
 ちぬこきん孫六屋敷志津屋
 あら長老のりやあへり
 中の間子露ぬ子歳入ささめり
 和永新宅
 さの櫃能多我仕舞へり砧う露
 餞清流難波
 蘆川のうらと喰さへりまぬの哉

下 七

雪の下母く
 ちぬこしる宿北庵子や茶の露仕
 美好き復やうのん唐の露も
 駒曳や山石のささめりりや菅根
 ちぬこしるの露平く
 甲斐弱や江戸へくしと折葡萄
 豚めや乳函谷やうふ露の道
 重し梳と画く
 中挽虫のさしるもはささよ三々の月
 細川ゆきせえあり

たつら矢牙切あや云々
泥水も七糸糸あり霄の月

音并可かあまの画子

傘持ハ月子後々すう也

小くうりあひ此月や明石信

水想観の松牙

系あまら免地まのありあ月

あまらよ時宗起くうのを

あつこあま

更々し祿宜の斬や杉乃月

月出く望ひらうむく小舟な
宿とりあ東城まやうの月

維摩の讚

山此こハ大衆なりる床乃月

張良圖

宵中の兵いこく子こ此月

布袋此月と挿絵子

有くあまの月の瓜はく交

閑倚橋

猿這ひ子あまらんや橋たつ

寺ありく葡萄贈ハ葉子りん

小野川檢校子餞

八月や琵琶とて笛ふをき先ん
あかきく猿の歯ふし峯能月

契不逢恋

国の火牙ひのゑ坐臥や社の内を

病中制禁好

橋桁の串海龍とついで月能友

遊子

いさあくな松の阿もいさか月

乃啼や弓弛越るれく昏の月

玉津島帰望

つこのみより更井能月を兼るくの

燃杭可火をんつきやれき月夜也

庖丁の片袖くくしくのち

月のささく詩の舟く山市く川武く

長柄文臺之記

のゑ月もむくしに橋を折目うれ

仲磨画賛

月新や舌を帆子まわく三かきや

月をのこれ越路の小者木曾の下女
ろ子なりぬ波子米守るる歌鳥

満百

あり阿島の月尔な里しより母乳乳
在明や待おなまのうらな君と伯父

所思

いさゝか公法くしや十四日
待宵や明けそ二見へそと看るは
木母も有る方の會ありそあめら
烏帽子屋の急はしきそよきあれ月

雨

約とめく金買部よりきぬ乃
川とちるる扉屋のいづれもあめ月
納屋子何雨のいづれもけあつた

合言秀亭

富士糸入日越を標やうあめ月

琵琶の心を

十五の酒をみおこくき婦の月
所思 系あそ
いづれもあめ月ありけあれ

夕汲をうてえて見んぬをぬの月
朝を花を江戸子生れくまの月
ましくうすのどきねもありくまの月
文畧

位花ぬも老る子ありきむれり
酒くまよ鼓くまき繁き子のつき
海妻舟の娘

おりの事あきりくま誰月見舟
得蟹無酒

海女画くまをぬ這をぬくまん式

人言や月見とぬをぬくまん式

風雨

雷牙揖ハあふまを月見舟

布袋の画

月くまも杖りつあけぬ小舟ぬ

平家落の邊風尔

宿なるぬれくま神くま月見舟

てのぬんぬ丸盆おひく月見舟

一休の狂詠自画を写して

律師沙弥お判談くま月見舟

上交語上

平家なるを太平記の八月も元は
娘ふも丸まを〜能を月見の乳

僧と出あは〜

小便牙起るも月哉 見えり危

名月や冬その〜人子松茸の事

名も〜やあ〜住吉乳はく田志の

名月や居酒のまん〜と頬あふり

名も〜のや味と〜も〜さ〜さ〜

名月や金〜の〜子力の〜友

名月や〜の〜くま〜可袖儿帳

三日糧をつ〜ひ〜ひ〜

名も〜のや十歩子鉄を握〜る

柴ふるも〜の〜人子

名も〜の〜ひ〜ひ〜心世結

名も〜の〜人子抱手〜膝〜

鐘音容紙

名も〜の〜や席堂の大鼓の〜て〜

名も〜の〜の〜も筆子〜る〜

名も〜の〜の〜の〜を〜と〜山

閏十五夜 前の十五夜江戸ありき六
河番危に照月をいんく後河し舞

待乳山

とぞ満里掉ちふらん千の歌鳥
松前か君子やあくる

二さ吹く大根くもさく月
宗回先月をう歌の句をとりく

芋ハく 凡僧初 ちん 二百 貫

君ういひきんと云さくやあくる
粒あふと青豆うさく 種ちんつる

いささひや竜眼肉のあくる歌も
十六宿ハ儒者と必きくし姿あり

あさくの童子扇さくさく画子
彗守の心ゆれさく 栗の月し

山川や志さく子 魅さくさく
みの栗子 袖さく持のねりひ

栗賣の舌関への歌 栗売く那
あさひの上み後さ子 長太即子

三栗のうさくありうさく 角 被
生栗を握つるさく 山 踏 小 歌

如是早のこつ後を

二子山ふつこ子むらうね栗のころ
泊瀬女牙村の志ふさげ忠ひきり

山差我遊吟

法庵や去ふ村さらをもあつて

露香月灯を隣

古寺や淡路ふまらんそつ後ふ

後府内番子拵立あへん

たうへ糸綫様こゝも木浩桶

御所柄やこの運子まひさの雨相

回来のし推ひ糸里おん松糸ふり

月日孔栗嵐葡萄あつたの甘露有

子亀の袖孔糸子のりし白ひく乳

南天やおのゝ実海やれ山のたぐ

菊てら此実をつゝ免とや雁おん色

南天や妹張のふへれ小倉やま

まをりまのしとあけく夫婦子

おりの糸糸ハ思ふ葉子とん秋菓

種竹三ひす

味ひきり多許由々ひきこまのし

茸や内幸のあはれに眉つくり
茸精や山志阿あはれに虚骨病
たきよりや鼻乃先をうらみ
松吟屋の庵子さの燈の土を初り
うつしと落す松をくま、有
りくちん中志道初し有
りそ志そ都志土や木乃子狩
松の香そ志と吹たりはく茸
鳳来寺の山北道とる時
冷泉の珠数りつす茸の如

松の系糸それ火先あき落葉油
川茸此香牙あはれやあはれ水
稲美見子女待そんそん川
ひひくや敷をみされ茶葉の中
あま基尔稲下も志そ手織る乳
いつしう年ひひと干んぬや大井川
稲塚あはれ戸塚あつく田守の那
あはれ甲うらみく落穂か
早稲酒や稲荷もあ出す嬉りのを
足あはれ亭主あはれ新酒かあ

太郎二房の目とさうく
か多出まの貝糸のくち守新酒式

横儿追悼

一漱を手向牙とちや 新 糶
とこ一巻やとれましくまの甚る麦畠
種か子 北斗とゆふひりり
茶のくまの吐志せしゆや新豆腐
生孫と糸雨とてとちね生約山
阿海とち鹿もみまらん鳴子奥
七十乃腰もそくすり なるこ

雞の下養つてまきり宥のまきく
いまぬあゝの庭や籠摺菊のむ
よのうまの敷くぬれくぬくのあ
駕糸ぬまて山崎の菊と云鳴り
志ありしまを具何ある菊は宿

北河うゝ従者短冊や

去雷の手をくみんきくやまの菊
まののまきく小僧くまの如法き
まきく張香や 籠より阿の如法
か新の基石糸ちりぬぬく乃る

雨多し地尔 這ふ菊を先折ん
こい詠子 百の折りて心代なき

昼菊

起くなく 蒼ハ後より かく纏るる

素堂残菊の會子

此より十日の酒 亭主あり

菜苑

菜苑とさる 所とあつても 菊のり免

病起 千山より菊を吐く

大母衣のりし 後我押や 瓶のきく

三鳥牙と重陽

門酒や 三鳥牙と 菊枝をさ

宮川志和子酒送らるる

重箱子花 ちよりの 菊枝をさ

みらるるあり乃みよあやむる

いのが我七百 法師走 菊牙入舞

丹苑のやと菊枝のたのしみ

出世者の一り 菊枝のたのしみ

時服 菊枝のたのしみ 菊枝のたのしみ

ふくみきく 歌人 菊枝のたのしみ

袖の浦しりす真つら

白菊哉貝珠美尔せん社乃ら

ひまきゝるゑ西行の圖尔

業をそそぐ日くもされく其方し

女の子はねくひくまうける人尔

か子余尔くらふもさせん妹うね

親を憂十日のきく哉この子く

震真の強りもかきな 菊 膾

未曉噺

清つよは子に立く見る業ハ

翁とひ業の交む可任をく

筆電多のゆれきたくやうし園の菊

子家の潑入百菊の餘情

業とやまきく示詩人の質をく

袖の色や起あうりくを業の象

きく此酒蒲萄のうり子志く

内菘風虎と十三回忌

菊の香やたあはるねね服さ

九月九日扇を指ひる人尔

きくやつもの星く輝く礼あ

茶花饒別

友成身茶花使平播戸ま
手入りまきく河系緒つむし菊
産寧坂くくうそ

菊紅紫多急路くもわのり危
流くのち水やけきく流るめり
水鼻平くさ免たうけまきく 拖

丑と月見きうそ

孫く種ぬい雨元政の十三夜
うきくまや江尻く三穂乃十三夜

志のそとむ茶師そ孫森の十三夜
茶研ても粉吹おろすは此月
後孫も上のち子ま雨夜、形
のち乃月確うきくそ日 傘
白鷺の甘菜ぬくやう尔後の月
いつまもち心まのそあ子

後の月松やまぬく 江戸孫産
まきく子をふくまきくや後の
家こあの木まもまきく 孫ち乃月
樽むしの男を栗平鳴とまきく

住の記や東芝形をて浦志月
白玉り等流と文く如滝のつま
やらぬ月秋を扱ちのき木挽早
漬蓼の種子や月成み細うま
笈に菓子古ゆさまお月見成
内遷宮の良材とておまうく
大工造の久しき顔や神志殊
御糸子まうく奉りて
内宮法神の遠拜なるを

月の秋や赤子もまのれ神踏山

外宮

日ハハと種く古殿身馬力のあ見え成
ちくや小判ちくく菊の花
毛津川あき
赤もくまの祭主の薬を送りたり
二月堂子系りけら七断食死僧
堂のうさく行ふ声成すて
日の目見え帟帳もてく艶の那
かのちりく髪を簾に掃くおまお成

戸越山庄

むくぬきふし任の美とほく白うれ
谷へつあき蒸みまゝの紅葉あり

三条橋上

片腕いみやこまのこすあき葉の如
りもちみわたるをくく酒のかん
山姫せん深うく流をくまをもちうれ

菅根

杉みくへふるそふくまを村の葉
りもちみわたる公家の子達くまをく山

そ役有り紅葉よくありささの山
りもちく胡熊の柘といふれきり

大山

腰押やあきか岩根せん下りもち
山あきくくうれく面や神をく地

新殿六間港

あつらぬ蒸のさく先や下紅葉
年のつとれ世やまをまりて岩よつ
木葉の食蘿を扶せんみくま
この風情狂言ふもく葛みもち

うぐの山入弦子

笈の角檜やん若る月志る籠り

霍々岡古樹のりやん

阿の代の供奉の扇やちる銀杏

遊弘福寺

木犀や六尺四人 唐 免の尻

うら結やるも餅くらうのやま

餞お長上京

うらの子花のたりや女を執

白扇倒懸東海天とく句とつ子

け頂有射く子子極くみらき

ふ雪の西千のゆや普賢不二

洞房の茶屋字兄生あ笛を好く

うとくは誠悼く

ちやんや笛みくあ千を塗土足履

見し月や大くこと終く 九月 尽

吉野山あききし

頼政あ月凡そ終あ 九月 尽

怨園離

傾城あ小あまのあし 九く 尽

丁鹿虫とてつりさくく我より善
九月尽
藤姫お松月あつま妹を師走か

冬之部

神無月あつま花月まの雪
さす砂や祢宜のゆほの神無月
玉津島あつま
高野あつま
卯塔あつま高野あつま神無月
東河内祢園清あつま
揚弓子あつまあつまあつま

神世振酒匂を橋と葦子多う
家々の留至者ら多かり大社
あまきけと時をくす秋乃鐘の音
響かす片日ありや響けし
志らるや葱臺まゝ一のこ柳

遊金園寺

八尋松楠の板戸残りる志られ
葉をそそぐ響けそすあ夕時雨
起る志ら連之端の近き米らり多う
釣板も夕日糸あふれ北志ら連

道慈翁病床

吹井ら申鶴我まほん時るが
網猪の引系はくふ志ら我う乳
時る疲れ私の物下あとかまら
時雨の山をふるにあん酒のうんとあ人子
あく我れあ酔やのころきむくや流
當麻寺柔の院まぐ

小おとくく人となか山にたる水
松陰も現る息を志ら我う
三天の飛渡西河の志ら我う

本多緑川公子侍坐しける松村雨と
ひく蝙蝠の鳴き聲をききしめりて
蝙蝠や柱を揺るおしきくも
守山の子子りり哉昔日鳴く白うね
あらしりらんさくぬき花むく射る
はまぬれ半身さあらしくまは
針鳴きまきしとあるりし
今態を志くらしし以そ阿の能

國阿の能

象山ハ是訪りし時雨那

と我のあらしかきさのま
志くもあらしし則ちひら
あらしも人をもひ出さし
鳴きぬ茶袋中へ我志くまは
松葉のすまふもあらし
ともし我翁後志の記
なすかしのまふらしや枯尾
同年記の三句
志くもあらしし海を墓とのあ
七し我の志くもあらし

辰霜や 鳳尾の印 志をこれよりも
遠く心や 自刺さるる水つり見

久米畧

風よ世を知らぬまねみ形し栗
このりしとちりぬ抱年のうらを見
ちりしや沖をくまきまの死をれ
風牙 氷おきくもや 狐志 尾
木枯れ 樹多れ小橋を 蒼きも 端
出翠千と紅雀と危のあまみりく
しるるもすまぬ嵐乃木葉を

志しつるまやけく 枯木の夕つく日
うらみさるる之井の二王や 冬木立
冬木立いつれしや山のたつまを

西遊山のまらめく

かすさうの尋常可死ぬ 枯野うれ

画讃

松一木を食の形をの かきぬる
捨人やあまのうらみ 冬木立
色蒼をぬをえ送るる
冬かきぬ 君もまき速やあまを

三日月のをくく記ほし年去指式
何葉の家ゆく市流頂戴のくくきこ
おきあの下部もあくんぬおとくれ
お猪くお祖文おくふ枝打お
くらおりの代くろあのおこくく
帰花くおれおを志くおんおくく
生崎新くお上系
練の本乃扇くくおなふおくりお
坊主小お清小お素坊主く帰花

口切やくくおれおくく線苗維菊
燈お舞やお鼓くくお金おく
お豊おお七十の契子
お川お浪をくくお相火桶
埋火お南おきおけりく
くく火お芽おやく人お薫お
埋火や土おおくおおり
閑居お慰心
おくおの短おおおや
おおおや巨燈おくんのくおぬく

火燧のうぐい森林子志業を梳と
 用防とのち者ある人めく海軍行
 づこ一生涯をいひあきとめく板倉
 せのしやとやひ中らみ跡後拾ひ
 志のしやと青紙と錢とをひらひより
 松の毛や鈴子富士と號 西巻 形
 俣子孫く一燧の散茶 筆味と
 きりしきひりりい佳 屏風と
 片手打落したる火鉢と幸此物成と
 忠度と灰りうと鏡と 火鉢と名

あもを及しつし重し二れ子對志と
 炭と金と鏡のぬきと手摺成
 志と鏡志ひりりいあらん谷のま
 炭竈や鈴木龜井、 軒此ま
 炭賣やおおろやい清水 鼻をえ
 すもかす如 煙或ぬきを 積の
 かく山度もそれ木葉よりみあり
 炭屑平いやしあらし木葉式
 新宅
 糸の端乃小巻形と山度依

さて白きかの一車 されおのりえん
茶の幽居 山彦の黒人を 侘名之
蛇のうのき貝と益めくく都多と
心つ島く家可くをきく
炭くくくく 炭こそとまの連とや二多
志山炭割く火箸と芥芥の幽なる
表えん山彦十九日くくくく好なり
大黒のくくくく家めく
酔さくくくく大黒出ん 夕魚の寸
寺の板牙小判をきく 夷講

山彦我山也 都を 酒をいん寸講
打益牙 飯も魚匠の笑うる
信也寺光僧春色くくくく
源氏もや季吟の家死 蛭子 隣
福天の床机牙と家也 仕切帳
子ハ衣帯 親もくつ子なり 夷講
幻何菴可く
新也
嵐の山彦もてあつらん 冬 心電

菰のたうそを根うゑおきとみかま
はくしと羽をん 兎やふゆあり

霜月朔日の例を

徳久や 嵐芝の宿 冬こそり
龍えせぬ 曉いさむ 下 邸 摺
何れん 藤魚とさふ 冬さうを
果さぬ 二冬おれく 京 冬 夜
帆か 船 舟 舟 堅田の冬さうを
此 本 戸 鎖 の さ れ く 冬 月
山 冬 此 舞 舟 舟 舟 舟 舟

下 四 七

大 改 入 人 冬 此 舟 舟 舟 舟 舟
冬 川 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

住吉めく

甚 難 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

立 厩

冬 持 の 足 下 を か き ん ん 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

むらうしせし一巻の筆書や残子夜着
紙子着てわらぬ御もあり大井川
あゝまきまゝくくや改申もこそち飛
目くこのりまきまゝく歌巾の浮世を
朝あどし馬の目く切つきん哉
あまのゆく事志多よ身也足袋改申
持入世くめみ切とく火打く那

大町新巻

水仙や鉦はひくくの 小嶋 臺
多仙有る御分ゆめ如星くく夜

柯求老人の手向

山茶花や 猫の糞く家お蓋のの

對友

肉麩の古酒をねく如室は素
困りり大くめくきりむろのう純
胡鮮せん妻やひくく如 紫人參
玄宿を世子見流はるく于菜賣
市辰場ふる休めり大根ひき
お沙るのい先く船くく大根引
日本の風呂ふきく比 麩 山

世の川無きものやみづあま
かふけやおのころもいと朝のま
秘蔵うゑ錦北かきこや筑戸汁

文畧

茶の湯めとゆへとてあまひけ
茶の味もさきそ配る納豆汁
碓つまでいふみ麻えや納豆汁

上遠水三十五日

おろふかほまゝお種お納豆汁
つと孫育 兔の耳を引たくと

金毛のむらさきとくろの霜の声
髪のおお木賊せん一夜拾牙より
滋楽燐の火洞尔あゝと雲の夢

貞 佐新宅

此宿を夜解もあつて移乃霜
酒くらゑ記浦赤剥もりおのこ
妙身童女を葬る

霜の鶴土牙あしんも被る
宗隆尼みづくさあま

婆子逢るうゑ命やせこの霜

野のささ乃敷伝承のきけり
鉄鍬治牙 隠者たの山子ん畑のお
まのまの何とおまの舟の中
不草のまの かまのまの 水はまの
播磨の傳どつて

粟めしめ焦く白ふや 霜おま
あまのまの かくまのまの 蟹
山大とまの 眞まの 志まの
懐死まの 白ふのまの 菊
ふまのまの 終のまの 七日市

みと神あもまのハるるり 流るるる

宿僧房

あまのまの 閑伽の折あまの 冬まの
名次へあまのまの 長挿うら
武まのまの 出まのまの
海へ降あまのまの 波のまの
みまのまの 木城まの まの
市川三升と祝す

まのまの やあまの 水まの 舟
滝幅や水まの 舟 舟まの 舟

田侍橋

うろくひや、鑑長なる家、橋付く言
考、凍や、蕘子、断糸の、うろくひや
長屋、刻付く、建し、人、志、を、あ、の、月、を
酒、賣、不、許、入、内、く、く、あ、ま、あ、し、し、く、を
水、を、の、細、ま、も、ま、く、く、水、極、の、水
柳、を、く、く、弓、を、射、の、の、憲、清、を、る
爰、あ、の、海、を、く、く、隣、家、子、館、を、か、く、く、を
た、く、あ、ら、の、城、乃、く、く、あ、は、ら、吉、野、山
使者、ひ、く、く、あ、い、人、通、家、と、あ、く、く、武

下

父の医師をなれし戯

純汁は、ま、い、本草、の、を、形、く、く、う、れ
河、豚、あ、く、く、水、に、あ、く、く、下、河、原
人、妻、あ、く、く、大、根、を、あ、く、く、あ、く、く、汁
生、を、あ、く、く、く、く、あ、く、く、あ、く、く、汁
世、中、不、舅、を、あ、く、く、河、豚、あ、く、く
あ、く、く、の、浦、お、め、く、く、く、く、
純、汁、の、を、あ、く、く、く、く、く、く、細、引、く、く、
あ、く、く、汁、也、祝、言、の、く、く、能、く、く、く、
妻、あ、く、く、飯、を、く、く、く、く、小、女、衣

鉄炮の心と種と切くくても汁
手と切くくよく切くく純の面
詩人の心を松江の飯とみん子
後子つりの書し魚子ありす重の飯
鮫鱈をとりきけハ厨の那
足代老うりやとふさあれそ子
蛎おまのや家あらんぬあつと
鯉の川河しるる秋のそふひ
梅津某秋田へおぬがを送り信く
あつと春のそふあつと
細代守

細代より大根ぬれをととらん
阿しゆや下しんちをせん
秋無鬼ぬれとひし大や亀田山
大川く巨之腐粘り甲秋無
給意結松糸のく家や三穂の海
市隅の侘人
宮其書屋くくくくくくくくく
貞徳羽五十五
常くくくくくくくくくくく
雨相月廿七鳥候干黄門光圀卿之海茶

真題周山之佳景

硝子の清茶屋

水の工と酔龍清々 水茶屋

清水寺音羽

振精舎 梢や子と花 玉作のり

耕作の清茶屋

根深く 夏の早苗や海も免子

黒木の清茶屋

我や紗半身 雲咲 黒木茶屋

藤棚

若葉やあゝ種牙ややる不破庇

西行堂

炭や岩間あつゝの清あそびと

唐橋

長橋やせこ子あひんぬあゝの松

八幡の志乃の海もきを死く

坊主かきと月も涙も 海川 水

何系書院

八子代とと河系流 彼世の御子

西湖

詩と阿ふ家あつらん二首の終小舟

右十章

越後屋の鼻糞とてく小舟もく
啼らるるもく糞の多の多あつらん
むく子もくお夜ハ多し虎、許
心もく全牙ゆくぬく浦ちとく
浦子もくあつらんぬくも大沖鳴
志海橋や投くたあつらん
とまはれ月影もくきやあつらん
妹、手ハ荒せん足、小舟ちとく

大丸講月次

沖の帆も十つことと女濱子鳥
氷年毛蓋とらよ鴛の中
十石も鴛おたつぬり終安
備口やおりの花とくも池の鴛

夜学感

鴛鳥氷も萩や蟬蛭煙蓋子羽を困
初巻の外さし鴨の毛とく
鴨此毛や鴛の念せん
志海も乃猪も波のつる免

燕一重つらゆや乞食のぬく火鳥
あつせしと鷹鳥とくぬ対する和

とあつせしと鷹鳥とくぬ対する和

志保しきく和政いあし和堂を
町神楽店あなのひらきとあつせし
ひらきとあつせしあし思ひを和堂
たましあし和堂とんて里神楽
和神楽あし鼻息あつせし面のうら
らゆあつせし大のつら出れ和堂
和堂はし小便を何や川を

下 四十八

智恩院町あつせし

あつせしあつせしあつせし乃妻のあつ
和堂を平人ものあつせし伏えあつ
は川雪や赤子平とあつせし胡朗
和堂やさつせしあつせし小玉益
あつせしあつせしあつせしあつせし
あつせしあつせしあつせしあつせし
あつせしあつせしあつせしあつせし
あつせしあつせしあつせしあつせし
あつせしあつせしあつせしあつせし
あつせしあつせしあつせしあつせし

或は方々の雪もんは深くせぬよる上も
我らも物やえく我く舞ふるや
楠の銅壺四間平一房とらや万客の
唇越うまほさ

雪の雪のゆのそ所せん 大銅壺

市中閑

はら雪や門牙 梅あ家夕月くれ
雪買子雪を結らや 鶴れ 雪
清水修行子とらとて

雪の だき雪の舞舞の日の気を

雪此日や船頭をのく 静かんを
る士牙 雪くまのあく 雪の宿

寒山の賛

森る思子 門の雪くく ち食 ちな
系雪くおり人く 睡く 笠のく人
門のくふ字と始く

馬の山灰くくそハ ぬき雪の心
雪の雪のくく世波くあ守 雪見成
色意をく危とこひて

表老ハ 山魚も 阿もん 菴みり雪

官城御普請朱就しく諸家は慶美
孫つらうみかひ

陪陪朱買臣あり 由乃の袖

山居の傍子

雪が汲く猪々茶と煮る太山寺

かき川平ひしむきしむえんさ然

釈迦しよふ改も雪の黒木く乳

醉吟

雪ももや居るまどくすふ忌衣

戸障子のまきと雪と 松たふこゑ

下中

聖王殿山

雪ももか大枝字括お山のま

かしくもや赤田へうるる雪はさき

遊女土佐をむくく人さくくぬぐ

黒塚のまあしらふや園の雪

りやまも川もよこりめく

半袴の山崎もありや雪はれ 和

鴨川も鴨を鉄輪り雪はえん哉

軍兵は山居まてまのや雪つらく

まの雪はまの雪はらる乃下り危

前より一字ぬく二言の句

麴覧の八亦ちうけくまよの雪

出口少く

さぬく子大張らうあや 袖孔雪

すそくあうとらふ小あをむれ歌はて

おのめや持くあうくゆま乃宿

腸込塩牙さけあや 雪如 猿

温飢屋へゆく念佛あり 夜せん雪

文畧

黒塚せんまうしあまぬり雪をんぬ

埋木せんぬしみ勝手や 雪うの友

雪の足もあうらうらうら 雪木ん

不二の相のかひやあうり御意を

とくく了簡きゆ 雪をよあひ

佛子と針ねへまりのとかく世を兼ね

極めぬく浅回らうらぬくといひ

諷妙くあはるるあうりぬあくの雪

青儂哉 聖孔裾那如 丸合 折

富士うらあま田ハ雪うら早苗うら

あうら茶の詩さこそ 盧全の雪の目

抜出しくゆきおはしお柄ゆく
西のありし朝のかきふ来子又をさる
秘蔵の鶴のさるる然るをいぬ
黒染子 白 吊や 雲うら
朝あもや日さるる酒の味
雪にまんとかきひ鉄の女あり

雪王窓

換料の史記も師走に常る
雪出し何と沙走の巻
妹年あへ師走の菊もまらけ

大小の嘘 元禄十年

大庭と志^四流^六く^八く^九霜沙走
為らりりの小坊主より師走
妖らりり狐ま川志^五 沙走
不^三分^一當^二春^三作^四病^五夫

酒中急し病をさるる志
新堰めく食くらり子師走
雪かき親忠將軍も志
山陵のまを分波まらり師走
子まらり加茂川まらり師走

ことしくくそ麻是ハヤししそらたき
伊勢橋をよせぬを満と 鉢 鼓
あつ川支の筑波糸とらやきとを
寒念佛抄をこゆれそあつとつも
何級か 飲酒をいの子かん好ふ所
南詔年ぬそく時
冬ふゆや南大門か 氷は 月
並り然ハひくこの氷や 冬造
極寒
さためよの送精もつし寒の氷

漫成五倫

君臣有義 家の子をよふと心なる年わされ
父子有親 純けや情を娘もちあふれ
夫婦有別 絆打めをそと歩ぬもあふ造り
長幼有序 そらるる娘の子にも猪うけ
朋友有信 君と糸懸子自浅のす志うあられ
極月十四日西吟大坂へのあふ
つそい や足代志賣子あふうはる
節季のや口はさうらうはる
元日と起とやうあり 節季の

其の季人の在る身あるや
 蝶くふく蝶く教を女房のりや
 蝶くふく蝶く蝶く蝶く蝶く
 忠信、其方野志まひや 蝶 拂

閑窓子羽帚をめぐ

蝶くふく蝶く蝶く蝶く蝶く
 鼻拭掃孔萑花玉や蝶くふく
 蝶く物子中す

ささくもたや徳人、まひる繪踊り

雪を若多明の餅はあうと我をり
 餅くふくや灯たてて 蝶くふく
 りちりちや風、目有るまゝに
 餅く尻と宿へまゝくくるそまを

震威流火志のりて

妹々子や薑ささくくりちりの番
 女子疱瘡くま家子たかんとり
 餅の粉や花雪くふく餅乃喚
 弱はゆまふ門ゆれを餅くふく
 くみ布誰とふらん餅折くめ

桑と松守と市に夕阿し
柳荷子中るとの身かたれ免
行露と方向由無引巻油

第代の八紙阿也免并楽帳
揚屋子酔房して
愚の直差紙亀をこころきり
詩商人年紙貪ふ酒債の船
いこころん逢れ酒屋の上たまり
けりしも板戸めくし餅の鏡
ゆくとも尔唾とらん鏡ぞこ

座右銘

行年や壁子とらるる家そんかき
ゆくやと也務評定親明士とく
やうく逢えと又や狭造とくゆ他
行幸に來あ〜んたり年乃く逢
小傾城ゆ〜あ〜んぬ〜の昏
魁船屋の夕日志のきし連北これ
子流り〜い〜川形〜人きぬ〜の暮
千親世〜い〜も〜ら〜や〜乃〜れ
逢中の故下み〜うり 年の昏

ときを流す翁くく死すく、八段田の由り
 伊賀代志くくおひひの形よありあるを
 こひてうめ山より入る年中をいす
 おきいよとくた後死小文やし年のく種
 流るくやふ年降死尻のく年忠 垢
 ちすのくく一年れ哀せよつるも發え入物うま
 年の形やひくぬのむ種のもありぬ
 臘鬼五つの子を産り樊中よやしる
 きくぬ州かけんるをいひて
 年流くく 鬼より祝く 焚火ぬ 結免

後州久継の別當さんはめじては通るを
 申しきくやあ年男忠 旋すくく
 豆をくく川流すのうもある 笑かめ旬
 三升の持鐘檀の自画賛
 今やう子園十郎や 鬼を 外
 乾えの節分
 長ふおのまきくくてちのし得方丸
 ぬく越やきく業平のは種ひき
 此中物の中子眠況く
 年らんを劉伯倫きあめくをく

乳母あきて志のも美女の心忘
午山宅あて忘り
割すそやハ乙女神楽 男ららと
有云霖より破戸ををかき入る
誰の心あてふ大夏とくわき
大晦日ねのころら、年と
聖代
鶴あてく日とそあけきり大晦日

雑之部

十及の図子文畧

尋牛 園子初冬吉系何り月夜これ
呼牛 呼子多阿の進はてききくぬ哉
隠牛 夏のをちを麻ぬ子疝気の起り
貧牛 仁朱判やとるうらもわし男
廻牛 小便も見牙あふぬ五月の那
番牛 わきも尻曉傘をかきせり
無牛 さらくす枕の床を学履式

羊牛 何となく冬夜隣とてさきさきり
送牛 何れもよりの子手陀羅尼やまのあ
老牛 昔のまこころんれとんり時子と那

於冠里公各歌五色梅 黒

黒梅やふれ去るるのりをらる
村るまゝさきれくや常根の松

天智天皇

らるまゝむ入麻々る小 四海波

河内郡 加保村

關和年太

